Japanese Association of Art Education(JAAEd) Newsletter No.112 February 20th, 2023

美術科教育学会通信 No.112

2023 年 2月20 日
（3月1日修正版）
(Revised Version 1st March)

□巻頭言　□第45回兵庫大会案内（最終案内）　□第45回兵庫大会案内（研究発表者及び発表演題一覧）
□臨時理事会報告　□大会日程に関する会員アンケートの結果　□書評　□新刊紹介　□本部事務局より

巻頭言　Introduction: JAAEd is a good partner for your study

「よき友」としての学会

副代表理事　大泉義一（早稲田大学）
Deputy Director: Yoshiichi OIZUMI, Waseda University

Yoshiichi OIZUMI

1. 学会は「よき友」足り得るか？

アサヒグループホールディングスが，全国の20歳以上の男女に対して行ったアンケートによると，「親友」の定義に対して最も多かった回答は「腹を割って隠し事なしで本音を話せる」(55.8%)であるという[1]。ここには「親友」とは，考え方や感じ方への共感を前提にしながらも，ありのままの自分でいることができ，さらに都合が悪いことでも率直に指摘してくれる存在であることが示されている。

本稿では，学会がそのような「親友」＝「よき友」足り得るのか，筆者の個人的な見解に基づいて考えてみる。だから，すでに学会との関わりが当たり前の人たちにとっては自明のことであろう。しかし本稿では主に，学会に入会して間もない人，これから入ろうとしている人，はたまた入会したのはよいが学会とどう関わればよいのか分からないという人に向けて話そうと思う。そうした素朴な語りが，すでに学会が自明となっている人たちにとっても，あらためて学会のあり方について考える機会となることを期待して。

2. 会員にとって「よき友」としての学会とは？

まず，私たち会員と学会が関わる機会のいくつかを挙げ，それぞれにどのように「よき友」足り得るか考えてみよう。

研究発表　最たる機会は，年に一回，各地を持ち回りで開催されている研究大会での研究発表であろう。あなたの研究発表に耳を傾けてくれる人たちは，間違いなく「よき友」である。質疑応答では，あなたの研究を価値付けてくれることもあるだろうし，鋭く厳しい指摘を通して省察を促してくれることもあるだろう。

コロナ禍によって，ここ数年の研究発表で対面の機会が損なわれていることは非常に残念だ。しかしそれは空間としての「場所」がないだけであって，集う人々によって生みだされる熱意や雰囲気という「場」は確かに存在している（これは実行委員会の方々のご尽力の賜物である）。この会員同士が出会う「場」への参画は，まさに「よき友」と関わる機会であり，会員の権利でもある。ぜひ行使してほしい。

研究部会　本学会では現在，「授業研究部会」「美術教育史研究部会」「乳・幼児造形研究部会」「造形カリキュラム研究部会」「インクルーシブ美術教育研究部会」の５つの研究部会が活動している。これらの部会は，個々の会員の切実な問題意識に基づき自主的に組織されている。だからいつでも新たな部会組織の提案が可能だ。参加はもちろん無料だし，興味があれば複数の部会に参加することもできる。しかも会員でなくても参加できるので，学会の内外をつなぐ機会でもある。「ちょっとのぞいてみようかな」という軽い気持ちでの参加も嫌な顔はされない，むしろ大歓迎である。さらに望むならば，部会の研究活動や運営に濃厚に関わるチャンスもきっとある。

かように熱心な研究部会の存在は，本学会の「よき友」としての特徴を示していると言えるだろう。

学会誌への投稿　学会をさらに「よき友」にしたいのなら，ぜひ自身の美術教育に関する主張を論文にまとめて学会誌へ投稿することをお勧めする。今や研究成果を発信する手段は実に多様化しているので，「論文」という形式にこだわらずに研究成果の公開を行っている人も多いと思う。しかし，論文を執筆することを通じて論理的な思考や科学的探究の作法などの力量を鍛えることができ，それにより，単なる思い付きではなく，既存の知識体系に新たな知恵を組み入れるこ

とで知の創出と発展に貢献することができる。そして査読者からのフィードバックを得る機会も実に有意義である。本学会の査読者らは，採否にかかわらず精緻な指摘と具体的な改善案を提示してくれる。

これまで投稿をためらってきた会員には，研究力の形成と向上に力を尽くしてくれる「よき友」としての学会誌への投稿に，ぜひチャレンジしていただきたいと思う。

多様な価値との出会い　本学会の会員は，美術教育という共通土壌に集う教育現場の実践家・大学をはじめとした研究機関に所属している研究者・画塾やアトリエ等の経営者・アーティストやデザイナーなど，多様な人々の集まりである。会員プロフィールの多様化は，ここ数年いっそう加速しているように見える。

それまでの自分にはなかった知見や考えを提供してくれる「よき友」との出会いは，先述した研究大会や研究部会，論文投稿の機会に多分に用意されている。

3. 学会の「よき友」とは？

ここまでは，会員と学会が「よき友」になる機会について考えてきた。次に，学会にとっての「よき友」，つまり学会と何らかの関係を持つ組織が，どのように「よき友」足り得るか考えてみる。

他学会　本学会と同じく美術教育学を研究分野とする学会には，「日本美術教育学会」，「大学美術教育学会」がある。周知の通り，これら３学会の連携組織として「造形芸術教育協議会」が年に３回開催されている。筆者もここ数年その会合に参画しているが，互いのポリシーや学術的態度を確認しつつ，ともに美術教育学の発展を目指す「よき友」としてよりよい協働の道を探っている。また本学会は，「美術」という研究分野においては「藝術学関連学会連合」に，「教育学」では「教育関連学会連絡協議会」に，「教科教育」の立場からは「教科教育学コンソーシアム」にそれぞれ参画している。それらの関連行事は学会ホームページに随時掲載されているのでご覧いただきたい。

学術研究の学際化が進む現況においては，こうした他学会との「よき友」としての関係が今後ますます重要となるだろう。

教育現場　本学会は教育に関する学会なので，当然ながら教育現場との関わりを持つ。教育現場と学会とが「よき友」足り得るには，従前からの「理論か実践か」という二元論を超え，互いに高めあう関係であるべきだ。その実現は，教育実践を対象に研究する研究者が，実践に対して客観的な立場を取りつつも，研究遂行においては実践者と対等な対話を行う関係を構築することでなされる。いっぽう実践者が自身の実践を対象に研究する場合は，自身の内にそうした研究者の立場を形成することによって，目の前の子どもへの働きかけとその結果から指導と効果の相関・因果関係を読み解き，問題提起や提案を行う態度が必要となる。

このような研究者と実践者の関係が，そのまま学会と教育現場の「よき友」としての関係であり，そうした関係から「新たな概念構築（言語の獲得）」がもたらされるのではなかろうか。

教育行政　美術教育学は，幼稚園教育要領，学習指導要領を通じて，文部科学省や自治体の教育委員会など教育行政との関わりを持つ。本学会と教育行政とが「よき友」としての関係を構築することは極めて重要な意味を持つ。教科としての図画工作・美術科を対象に研究を行おうとするならば，学習指導要領が前提になることは当然である。しかしながら，その理念や内容をそのまま実践として再生するのは単なる受容であって学術研究とは言えない。学習指導要領に対する冷静な批評的思考を通して，上述した「新たな概念構築（言語の獲得）」を目指す建設的な態度が必要である。反対に，教育行政は学会における学術研究の動向に注目し，教育課程の編成や開発等に生かしてゆくことが求められよう。

学会と教育行政とが「よき友」足り得るためには，こうした相互関係性が必要である。

4. 「信頼」できる関係に

教育哲学者ボルノウは，子どもに対する教育者の態度として「信頼」を挙げている。「信用」が一方的なふるまいであるのに対して「信頼」とは相手の応答を要求するのだという。さらに，その「信頼」の持つ相互関係性が教育をささえる重要な要件であるとして，教育者と子どもの関係を次のように述べる[2]。

> 子どもはじぶんの諸能力を，それらによって為しうるぎりぎりの限界まで試そうとする自然な願望をもっている。もしも教育者が，いつもいつも子どもを彼の能力の限界いっぱいまで導くことをせず，最後の厳しさを彼に要求しないのならば，柔弱な子どもを育てることになるであろう。

厳しい要求をも含めた相互関係的な「信頼」こそが，教育が成功するために必要な教育者の基本的態度としているのだ。

これは，教育者と子どもの関係について述べたものであるが，本稿で述べてきた「よき友」としての学会との関係も，ボルノウのいう「信頼」に基づくものなのではなかろうか。果たして，会員のみなさんは，本学会とどのような「よき友」としての関係を持っているのだろうか。たずねてみたいところである。

1) アサヒグループホールディングスお客様生活文化研究所『青山ハッピー研究所』https://www.asahigroup-holdings.com/company/research/hapiken/index.html（2023年2月13日参照）

2) O.F.ボルノウ『教育を支えるもの』黎明書房，1989年，p.121

第 45 回兵庫大会案内（最終案内）

Final Notice of the 45th Conference in Hyogo

第 45 回美術科教育学会 兵庫大会

大会実行委員長　勅使河原君江（神戸大学）

第 45 回美術科教育学会 兵庫大会

日時：令和５年（2023 年）３月 26 日（日）・27 日（月）

開催方法：オンライン配信（会場：神戸大学）

主催：美術科教育学会

共催：神戸大学創立 120 周年記念事業

大会テーマ　「世界をとらえる方法としてのアート」

このたび第45回美術科教育学会兵庫大会をオンライン（リアル配信）にて開催することとなりました。対面での大会開催を楽しみにされていた方もいらしたかと思いますが，オンライン上でも参加者間のディスカッションが活発に行える開催方法を用意しております。オンライン開催によって様々な事情で対面での参加がままならなかった方も参加しやすくなるなど，その利点も期待できるかと思われます。本大会のプログラムは，学会参加者による口頭研究発表，大会記念講演として建築家・安藤忠雄氏による講演，４件の大会実行委員会企画など２日間にわたっての開催を予定しています。皆様が研究成果を発信すると共に情報交換を通して多様な「世界をとらえる方法としてのアート」の発見へとつながり，参加してよかったと感じていただける大会となりますよう，現在，大会実行委員会が中心となり準備を進めております。本大会へのご参加を心よりお待ち申し上げます。

第45回美術科教育学会 兵庫大会開催概要

■会期 2023 年３月 26日（日）・27日（月）

■会場 神戸大学よりオンライン開催

・大会Web サイト：https://confit.atlas.jp/guide/event/arteduhyogo2023/top

■当大会での口頭研究発表の申し込みはすでに締め切っております。

■大会予定表

【1 日目】2023 年 3 月 26 日（日）10:00～

時間		
10:00～10:20	開会式	
10:30～12:00	安藤忠雄氏記念講演	
12:00～13:00	昼休憩	
13:00～15:00	実行委員会企画① 自己をつくり、人と関わり、世界を広げるために 「乳・幼児の造形が気づかせてくれる10のこと」から	実行委員会企画② 美術解剖学・具象・素描 -アカデミックな内容がもたらす学際的イノベーション-
15:10～16:20	口頭研究発表 Zoom A～E 会場にて開催　①15:10～15:40　②15:50～16:20	
16:50～	研究部会交流会は各研究部会がオンラインにて会場を設定して開催（大会 HP にて各研究部会の開催情報を掲載します）	

【2日目】 2023 年 3月 27 日(月)　9:00～17:20

時間		
9:00～11:30	口頭研究発表 Zoom A～E 会場にて開催　③9:00～9:30　④9:40～10:10　⑤10:20～10:50　⑥11:00～11:30	
11:30～12:00	令和４年度美術科教育学会美術教育学賞及び美術教育賞奨励賞　表彰式	
12:00～12:30	昼休憩	
12:30～14:30	実行委員会企画③ STEAM 教育・学際的な学習におけるアートの可能性	実行委員会企画④ いま、子どもとの対話をとおして世界を知る
14:40～15:10	口頭研究発表 Zoom A～E 会場にて開催 ⑦14:40～15:10 ⑧15:20～15:50　⑨16:00～16:30	
17:00～17:20	閉会式	

■大会参加の手順
オンラインによるクレジット決済でも銀行振込による決済の参加登録でも登録方法は以下の手順となります。
① https://artedu.confit.atlas.jp/login より，Confit 共通アカウントを作成する。
② 兵庫大会用アカウントを作成する。
③ 兵庫大会参加登録を完了する。
④ 登録後，「参加登録受付メール」が届きますのでご確認ください。
⑤ 登録後，参加費の支払いをオンラインクレジット決済もしくは、銀行振込による決済で行なってください。
支払いは以下の２つの方法からお選びいただけます。
＊オンライン決済（クレジットカードのみ）の方法：VISA，MasterCard，JCB，AMEX，Diners Club
・参加登録後，すみやかに個人アカウントよりオンラインによる入金をお願いします。2023 年３月27日（月）９時までに参加登録とオンライン決済をお済ませください。
・クレジット決済を選択すると個人アカウント内で領収書発行が可能となります。
＊ 銀行振込による決済の方法
・参加者氏名と振込者氏名を必ず一致させてください。
・銀行振込でお支払いされる方は，2023 年３月10日（金）までに振り込みをしてください。
・銀行振込みをされた方で，領収書が必要な方は，参加費の振り込み後に大会HP領収書発行申請フォームより2023 年３月27日（月）までに申請してください。
・2023 年３月10日までに銀行振込ができなかった場合は，クレジット決済で参加費の入金をお願いします。
【銀行振込先】
銀行名：三井住友銀行　　支店名：明石（アカシ）支店　　口座番号：普通・６２１３５２０
名義：オオニシ　ヒロシ
■学会参加費について
・兵庫大会に参加いただくには、以下の参加費を参加前にお納めください。
正会員 4,500 円　　非会員 5,500 円　　学生・大学院生等 2,500 円
■大会に参加されるみなさまへのお願い
・大会参加前の事前準備について
① 当日Zoom にアクセスする端末のOSバージョンがZoom に対応しているかを確認する。
② Zoom アプリをインストールする。
③ Zoom アプリ最新版へアップデートする。
■当日の参加に際して
・回線不具合時について
当日，Zoom を使用したライブ配信は，開催大学のインターネット環境を使用して行います。また，発表者や視聴者はそれぞれのネット環境からアクセスするため，双方の回線の状況などにより画像や音声が乱れる場合があります。状況によってはライブ配信が切断され再接続して再開する場合も想定されますが予めご了承ください。
・参加資格について
参加登録をされた方のみご参加いただけます。参加登録時のＩＤ，パスワードの第三者への提供はご遠慮いただきますようお願い申し上げます。
・記念講演，実行委員会企画，口頭発表，開会式，閉会式を視聴・閲覧するためには参加登録が必要です。大会WEBサイトは大会会期中に閲覧制限が掛かりますので，参加登録時に登録したメールアドレスとパスワードによるログインが必要になります。お手元に準備のうえご参加ください。
・大会日前から発表者の抄録，予稿を閲覧できます。
・ご参加いただく全ての方に，会期中に配信される発表の録画，録音を禁止しております。ご理解いただきますようお願い申し上げます。
■お問い合わせ先
【第45回美術科教育学会兵庫大会に関するお問い合わせ】　E-mail: 45th.arteduhyogo@gmail.com
【年会費・入会・その他会員資格等に関するお問い合せ】
本部事務局支局（ガリレオ学会業務情報化センター）　E-mail: g030aae-support@ml.gakkai.ne.jp

第 45 回兵庫大会最終案内（研究発表者及び発表演題一覧）

Final Notice of the 45th Conference in Hyogo: List of Presenters and Presentation Titles

第 45 回美術科教育学会兵庫大会

大会実行委員長　勅使河原君江（神戸大学）

第 45 回美術科教育学会　兵庫大会スケジュール

【1 日目】2023 年 3 月 26 日（日）

	口頭発表 A	口頭発表 B	口頭発表 C	口頭発表 D	口頭発表 E
時間	Zoom３	Zoom４	Zoom５	Zoom６	Zoom７
① 15:10 ～15:40	中学校美術科教育における映像表現題材の開発と実践について　～６Tube・４年間の取り組み～ 鈴木 紗代[1]（1. 前橋市立第六中学校）	小学校図画工作科の「絵に表す」の学習指導について－指導上の課題に着目して－ 吉田 岳雄[1]（1. 横浜国立大学大学院教育学研究科）	アートプロジェクトの手法に基づく地域密着型の工芸ワークショップの実践的研究 市川 寛也[1]、庄司 知生[2]（1. 群馬大学、2. 秋田公立美術大学）	ART を主軸とした STEAM の実践 ～3D プリンターによる地形図～ 渡邊 晃一[1]、廣川 豪[2]（1. 福島大学、2. 福島大学附属中学校）	造形の遊びにみる乳・幼児の非認知的能力の育ちと学び-保幼小接続に向けて- 丁子 かおる[1]（1. 和歌山大学教育学部）
② 15:50 ～16:20	高等学校芸術科工芸における指導内容の特徴に関する検討- 用具の扱いに関する指導内容の観点から- 髙野 雄生[1]（1. 東京都立拝島高等学校）	知識構成型ジグソー法を用いた美術鑑賞の授業デザイン －小学４年生におけるクレー作品の鑑賞実践から－ 古田 啓一[1]（1. 小田原短期大学名古屋サポートセンター）	トーランスの創造性テストの再考と試行Ⅳ －大学生対象の調査結果及び幼児・児童との比較－ 櫻井 晋伍[1]、犬童 昭久[2]、王寺 直子[3]、栗山 裕至[4]、白石 恵里[5]、丁子 かおる[6]、樋口 和美[7]、前村 晃[8]、宮崎 祐治[9]（1. 福岡県立大学、2. 九州ルーテル学院大学、3. 認定こども園あかさかルンビニー園、4. 佐賀大学、5. 大分県立芸術文化短期大学、6. 和歌山大学、7. 福岡女子短期大学、8. 佐賀大学名誉教授、9. 神野こども園）	図画工作科を軸とした教科等横断的な学びの開発　－小学６年生における実践から－ 藤井 康子[1]、西口 宏泰[2]、麻生 良太[1]、白澤 和文[3]、伊東 俊昭[3]（1. 大分大学教育学部、2. 大分大学研究マネジメント機構、3. 佐伯市立明治小学校）	視覚障害のためのインクルーシブメディアアート教材の開発：タクトロープと Koma Oto の開発を中心に 茂木 一司[1]、布山 タルト[2]、大内 進[3]、竹丸 草子[4]（1. 跡見学園女子大学、2. 東京藝術大学大学院映像研究科、3. 星美学園短期大学日伊総合研究所客員研究員、4. 長岡造形大学大学院）

【2 日目】2023 年 3 月 27 日（月）

	口頭発表 A	口頭発表 B	口頭発表 C	口頭発表 D	口頭発表 E
時間	Zoom３	Zoom４	Zoom５	Zoom６	Zoom７
③ 9:00 ～9:30	図画工作科の授業における個に応じた指導に関する一考察 −逐語分析に基づく児童の思考の変容に着目して− 粟津 謙吾[1]（1. 成城学園初等学校）	絵画造形クラスにおけるヴァルドルフ教育の実際 吉田 奈穂子[1]（1. 筑波大学芸術系）	西田秀雄による絵日記指導とクロッキー教室指導の実践 −昭和 20 年代の京都市小学校における実践資料に着目して− 勅使河原 君江[1]（1. 神戸大学人間発達環境学研究科）	グローバル市民を考える芸術による国際協働プロジェクト 中村 和世[1]、姜 家晨[1]、李 叢懋[1]、和田 幹[1]、Natalie Pavlik[2]（1. 広島大学（日）、2. コンコーディア大学（カナダ））	プログラミング教育の幼小接続を円滑にする 表現領域のアプローチカリキュラムの開発 橋本 忠和[1]（1. 北海道教育大学）
④ 9:40 ～10:10	チーム学校でつくる「学校を美術館に」プロジェクト 久保田 美和[1]（1. 千葉市立幕張南小学校）	美術科教科書 1956～2021 年度 ２学年ないし 2･3 学年㊤「見て表す」題材頁における解説文の検討 山口 喜雄[1]（1. 元宇都宮大学教育学部）	市民ギャラリー事業としてのアーティスト・イン・スクールの効果 −川口市立小学校での実践を通して 秋田 美緒[1]（1. 筑波大学大学院）	戦前の図画に関する教育掛図研究 牧野 由理[1]、金子一夫[2]（1. 埼玉県立大学、2. 茨城大学（名誉教授））	人との関わりから読み解く美術館教育普及の変化と現状 −公立美術館の情報発信を手がかりとして− 田中 梨枝子[1]（1. 京都芸術大学）
⑤ 10:20 ～10:50	子どもが目指す「かたち」の現出に関する一考察 -図画工作科「造形遊び」の協同的な評価を通して- 佐藤 絵里子[1]、八嶋 孝幸[2]、坂本 卓也[2]、外崎 美佳[2]（1. 弘前大学教育学部、2. 弘前大学教育学部附属小学校）	教師の作品体験に根差した美術教育づくり方法論 小口 あや[1]（1. 茨城大学）	「造形遊び」の実施状況に関する一考察―東京都におけるアンケート調査の結果を手がかりに― 伍 翔南[1]（1. 早稲田大学大学院教育学研究科）	沢野井信夫（1916-1990）の「あそび」を活かした美術教育の構想と長谷川三郎（1906-1957）の一般向け美術書との関係 ―沢野井の師，長谷川の 1950 年代の著作をふまえて 宇田 秀士[1]（1. 奈良教育大学）	地域に根ざした木育活動 ―木育と ESD をつなぐ竹アートに携わる大学生の変容― 三上 慧[1]（1. 東洋英和女学院大学）
⑥ 11:00 ～11:30	高校美術・工芸における探究型授業モデルの構築―アートメダルを通した実践― 小松 俊介[1]（1. 筑波大学附属高等学校）	アファンタジアを含めた認知多様性に美術教育はどう貢献可能か 佐原 理[1]（1. 徳島大学大学院社会産業理工学研究部社会総合科学域）	A/r/tography による探求の生成と相互作用 −写真と映像表現の共同探求の事例をふまえて− 廖 曦彤[1]（1. 筑波大学　人間系教育学域）	戦後美術教育史の構想 Ⅱ 新たな戦時下・戦後美術教育史区分の試み 金子 一夫[1]（1. 茨城大学（名誉教授））	美術館との連携による障害のある人のオンライン対話型鑑賞 池田 吏志[1]（1. 広島大学）

11:30 ～12:00	令和 4 年度美術科教育学会 美術教育学賞 及び 美術教育賞奨励賞　表彰式				
12:00 ～12:30	昼休憩				
12:30 ～14:30	実行委員企画 ③ ④				
⑦ 14:40 ～15:10	図画工作・美術科教育における教師の発話に関する実践研究・Ⅸ －教師の「子ども観」をふまえた授業研究の意味－ 大泉 義一[1]、永縄 啓太[2]（1. 早稲田大学、2. 横浜市立南太田小学校）	「記憶で／見て／速く」描く指示構成と質的変化　－保育・教育専攻学生へのメモリードローイング指導の実践を通して－ 髙橋 文子[1]（1. 東京未来大学こども心理学部こども心理学科保育・教育専攻）	創造美育運動をどう評価するか －運動の客観的評価に向けて－ 新井 哲夫[1]（1. 群馬大学名誉教授）	題材を設けない一斉描画活動における環境設定と援助－ある認定こども園の事例 大江 登美子[1]、青沼 未来（1. 佐賀女子短期大学こども未来学科）	日米大学生のバーチャルコラボレーションによる共同生活空間のデザインの経験 家﨑 萌[1]、リョウクリスティン[2]（1. 金沢学院大学、2. ノースカロライナ大学ウィルミントン校）
⑧ 15:20 ～15:50	視線・瞳孔計測による鑑賞体験の影響分析について 結城 孝雄[1]、村上 尚徳[2]、石賀 直之[3]（1. 東京家政大学 、2. 環太平洋大学、3. 東京造形大学）	ワークショップ実践の省察のための評価論に関する考察 －東京ミッドタウンキッズウィークにおける造形ワークショップから－ 東村 ほのか[1]（1. 早稲田大学 大学院 教育学研究科修士課程）	アイソメトリックデザインによる空間設計のための教材開発 石原 由貴[1]、村山 祐子[1]、浦 正広[1]、田中 孝治[1]（1. 金沢工業大学）	アート・ワークショップにおける「受動と能動」についての検討 －「受動的行為」に着目して－ 前沢 知子[1]、田中 玲於奈[2]（1. 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、2. 清和大学短期大学部こども学科）	
⑨ 16:00 ～16:30	教員養成教育における図画工作科の模擬授業の充実をめざして 隅 敦[1]（1. 富山大学教育学部）	中学生の美術鑑賞における省察を指導する方法に関する実証的研究 劉 栓栓[1]（1. 筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻）	造形表現における例示語を用いた子どもの意識調査とその分析 山内 佑輔[1]（1. 新渡戸文化学園）		

＊本スケジュール表は、2023 年 2 月 3 日現在の演題と発表者名です。

2022 年度 第 2 回臨時理事会報告

Report on the Second Extraordinary Board of Directors Meeting for 2022

本部事務局　相田隆司（東京学芸大学）

美術科教育学会 2022 年度第 2 回臨時理事会について以下の通りご報告いたします。

（1）開催方法と議題

開催方法は電子メールにより資料配布し，オンラインフォームに回答を行うものである。回答期間終了後，回答結果（記名）を理事会に電子メール報告した。開催期間は、2022 年 11 月 21 日（月）～ 27 日（日），参加者は全理事 21 名であった。議題は，１. 大会開催日程希望アンケート結果（報告），２. 第 46 回弘前大会日程について（審議），３. 上記に伴う課題の検討（意見聴取），以上の ３点であった。

（2）審議結果

①議題 １． 大会開催日程希望アンケート結果（報告）

直江俊雄代表理事より，アンケート集計結果（2022 年 10 月 20 日から 11 月 10 日の間，本学会会員に対して行われた「大会開催日程希望アンケート」）につき，資料配布と報告がなされ，本件に関する理事からの意見をオンラインフォームで収集した。なおこの議題１においては，「大会開催日程希望アンケート」実施までの経過も直江代表理事から報告があった。以下記載のとおりである。

―2022 年 9 月 10 日開催の第１回理事会において，第 46 回弘前大会（2024 年 ３月）開催承認ならびに意見交換の場で，「大会参加者を増やすための開催時期の検討」（「学会通信」第 111 号理事会報告）が話題になり，学校教員が参加しにくいと想定される ３月末開催を見直し，東京大会のような ３月上旬に開催する案が検討された。その後，本当に ３月上旬のほうが参加しやすいのかどうか慎重に検討するため，さらなる情報収集の必要や会員アンケート実施の可能性などが話題に上った。10 月に理事対象のアンケート，10 月 20 日から 11 月 10 日の間に全会員対象のアンケートを行い，３月初めか ３月末のいずれの方が参加しやすいか意見を集めた。

②議題 ２． 第 46 回弘前大会日程について（審議）

弘前大会日程を 2024 年 ３月 ２日（土）・３日（日）とする案について、オンラインフォームを通して投票がなされ，次の結果を得た。賛成 16 票　反対１票　その他 ４票。その他の ４票については，反対ではなく案の日程を容認するというものであった。これにより，弘前大会の日程を案のとおり決定した。なお，本投票に先立ち，下記の ３点の事項が代表理事より提示されている。

１．これ以降の大会も同様の日程に固定することを決定するものではない。
２．弘前大会の開催結果やその後の開催大学の意向も尊重しながら検討する。
３．この日程に伴う課題についても早期からよく検討して対処する。

さらに、臨時理事会を通して理事から種々の貴重な意見が寄せられたので、その趣旨を十分考慮した上で今後を進めるとされた。

③議題３．上記に伴う課題の検討（意見聴取）

弘前大会を３月初旬にすることにともなう課題への対処に関して以下３点に鑑みた意見聴取がなされた。

１．理事会・総会等日程について３案を提示。
２．発表者の準備期間が短くなる点への対応策を提示。
３．下旬のほうが参加しやすい会員への配慮についての案。

以上の３点である。

（以上）

美術科教育学会大会日程に関する会員アンケートの結果

Results of the Questionnaire about the JAAEd Conference Schedule

代表理事　直江俊雄（筑波大学）
Representative Director: Toshio NAOE, University of Tsukuba

本学会通信の「2022年度第２回臨時理事会報告」の経過説明にある通り，第46回弘前大会日程について，より多くの会員が参加できる日程の可能性を探るため，会員へオンラインアンケートを行った。

結果は臨時理事会に報告され，今後の大会日程を考える上で重要な資料となった。

業務多忙の中で貴重な時間を割き，アンケートにご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げたい。

実施概要

アンケート実施期間　2022年10月20日から11月10日
実施方法　全会員へ電子メールで回答依頼，オンラインフォームへ回答
回答者数　126名
質問項目

１．どちらの日程のほうが，より参加しやすいですか。一つを選んでください。
- ３ 月初め　2024 年の場合，３ 月 ２ 日（土）・３ 日（日）
- ３ 月末　2024 年の場合，３ 月 29 日（金）・30 日（土）
- どちらともいえない

２．大会開催日程について，ご意見や参考情報などがあれば，ご記入ください。
（補足：選択肢が３月上旬と下旬の二択であったのは，開催校で可能な日程がこの２つであったためである）

結果のまとめ

１．回答者について
全会員数627名（理事会報告8月26日現在）に対し，回答者数126名（20%）
回答者の内訳は幼小中高等学校教員が23%，大学等教員が67%，大学院生２%，その他（退職者等）８%である。全学員に占める各所属の人数構成が不明であるため，回答者の所属が偏っているのかどうか判断できないが，大会参加に関心の高い会員からの回答が集まったと考えることもできるだろう。

２．日程希望について
全回答者では３月初めが56%，３月末が24%，どちらともいえないが21%であった。
所属別の集計は，各図表を参照。

３．意見等について
３月初めを希望する理由としては，主に下記が挙げられる。
- 勤務校等での業務日程
- 出張旅費申請の手続き日程
- 勤務校異動時期

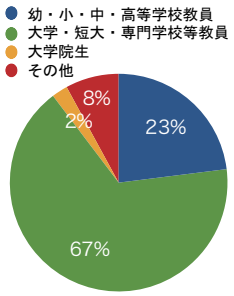
３月末を希望する理由としては，主に下記が挙げられる。
- 勤務校等での業務日程
- 大会発表の準備期間確保
- 理事会，総会，大会準備等日程

どちらともいえない場合，より多くの会員が参加できる日程を希望するとの意見が見られる。

➔ 集計結果の図表を次ページに掲載する。

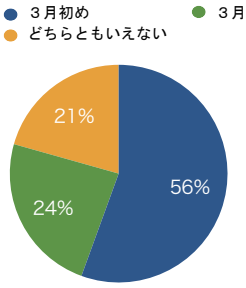
美術科教育学会　大会開催日程希望アンケート　　集計結果

図１　回答者内訳



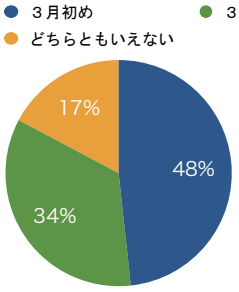
所属	回答数	%
幼・小・中・高等学校教員	29	23
大学・短大・専門学校等教員	84	67
大学院生	3	2
その他	10	8
計	126	100

図２　希望日程（全回答者）



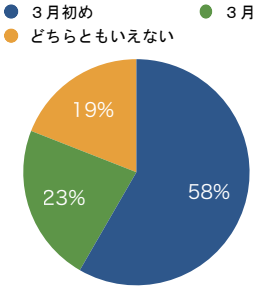
希望日程	回答数	%
３月初め	70	56
３月末	30	24
どちらともいえない	26	21
計	126	100

図３　希望日程（幼・小・中・高等学校教員）



希望日程	回答数	%
３月初め	14	48
３月末	10	34
どちらともいえない	5	17
計	29	100

図４　希望日程（大学・短大・専門学校等教員）



希望日程	回答数	%
３月初め	49	58
３月末	19	23
どちらともいえない	16	19
計	84	100

表１　希望日程（大学院生）

希望日程	回答数	%
３月初め	2	67
３月末	1	33
どちらともいえない	0	0
計	3	100

表２　希望日程（その他所属）

希望日程	回答数	%
３月初め	5	50
３月末	0	0
どちらともいえない	5	50
計	10	100

書評　Book Review

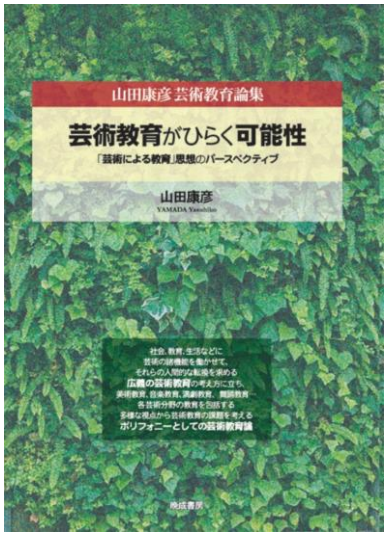
山田 康彦 著，発行：晩成書房，2022 年９月（Ａ５版），ISBN 978-4-89380-506-5

芸術教育がひらく可能性 ―「芸術による教育」思想のパースペクティブ―

ふじえ　みつる（愛知教育大学　名誉教授）

本書の構成と概要

本書には「芸術教育」をめぐって，1991 年から 2021 年までに，各種媒体に掲載された論文，16 篇が収録されている。１論文を１節として，計 16 節が４つの章に振り分けられている。紙幅の関係で，それぞれの論文名はあげないが，以下に，その章立てと各章を構成する節の概要を紹介する。



第Ⅰ章　芸術教育の射程

第１節では，「学校教育におけるアートの可能性」について，鶴見俊輔の「限界芸術論」の「芸術そのものの観点につきながら他の活動の中に入ってゆき人間の教育活動全体を新しく見直す方向をここ［限界芸術］から見出せるのではないか」を引用し，そうした芸術が「他者と相互交渉できる身体性の獲得」や「多様な自己の中で真正な表現を獲得する」教育に果たす役割を主張する。第２節では，北川民次の，「既成の概念や知識ではとらえきれない生きた知識や経験を秩序づけ意識化」する芸術的表現における「整理」に注目しつつ，H. リードの「芸術による教育」における既成の文化や社会への批評を見過ごしている日本での受容の仕方を批判する。第３節では，自分なりに「真実らしい」と納得のできる「真正な表現」について，アウトサイダー・アートなどに言及しながら，文化的主体性の形成における「表現」の役割が述べられる。

第Ⅱ章　芸術教育の社会的展開

第１節では，ハンナ・アーレントによるナチズム時代の分析などを例示しながら，人間のもつ攻撃性や破壊性，他者への暴力を抑止する芸術教育・美的教育による平和教育への期待が述べられる。第２節では，日常的活動と芸術活動とのつながりを求めるドイツの「社会文化運動」，文化民主主義を求める英国の「コミュニティ・アート運動」について，現地での視察体験も交えて報告・論評される。第３節では，コロナ禍で見えてきた教育の課題について，第２節でのドイツや英国の運動を参照しながら，①表現の真正性，②各人が力と権限を獲得するエンパワーメント，③対話と共同性を根源的な契機とする芸術教育による課題解決への期待が表明される。

第Ⅲ章 学校改革と芸術教育

第１節では，「芸術による教育」が，芸術活動を通しての自己の発見と育成というような一般的な理解にとどまる“狭い“「芸術による教育」ではない，欧州の運動にみられる批判性をもった，“広義の”「芸術による教育」への理解を求める。第２節では，「総合的な学習の時間」に，教科の枠を超えて，生活に根ざした「限界芸術」を導入することで，学校文化の転換を図る契機になる可能性が述べられる。第３節では，「芸術的価値と教育的価値の同時的実現のためには，教育は，芸術的ないし文化的な価値の追求の下に置かれることによって最も教育的である」とする学校での文化活動観を批判的に論じている。第４節では，山住正己は，文部省唱歌を「教育芸術」として批判し芸術的価値に直結した「芸術の教育」を求めたが，そのことで，子どもが文化的主体性を獲得するための普通教育としての芸術教育と専門家養成の芸術教育とを同質化してしまったとする。

第Ⅳ章 美術教育論の探究

第１節では，池田栄による「認識活動と美的感受性と創造的想像力の豊かな発達を保障する美的教育の理念と方法に貫かれた指導」を追求する姿を的確に分析的し，第２節では，造形表現能力の発達論に関して，発達の視点を固定的な尺度にせず，９歳の節や思春期での「意識を外に向けていくとき」と「内面を見つめるとき」との交互の活動に注目すべき課題を確認する。第３節では，第２節を受けて，「発達図・案（人格の発達と結びついた造型表現能力の発達の道筋と発達の節）」をもとに，絵を描くことは「既存の自分の殻」を破って「対象と自己との間で深い受動と能動の作用を働かせる根源的な相互交渉力によって成り立つ」ので，その相互交渉に慣れ

ていない子どもは抵抗を感じるなどの発達課題を確認する。小学校中学年頃からの写実性への要求は「自然な発達の方向」とされるが，その要求は「社会的・文化的に限定されて」いるともされる。

第Ⅴ章　芸術教育の基礎概念の再考

第１節では，芸術の真理性をめぐって，「表現」(expression)と「模倣・ミメーシス」(mimēsis)とを対比させ，近代芸術以後の主観的な自己表現という芸術観も，真理を求める以上，イデアの「模倣」論に与することになるが，芸術教育にとっては「表現」も「模倣」も必要な原理だとする。第２節では，中村雄二郎が『共通感覚論』で，人間の諸感覚の「体性感覚的統合」と「常識（コモン・センス)」とを分け，「常識」を否定的に論じていることを批判し，カントによる「センスス・コムニス(sensus communis)」に見られるように「コモン・センス」は，他者と世界を共有する基底的感覚としての共通感覚であり，それが説得と対話による「公的世界」を形成する実践知になると指摘する。第３節では，美術・芸術教育学の「学」としての固有性について，「哲学や美学のカテゴリーに基づいた美術・芸術教育の研究は，研究ではあっても教育学としての美術・芸術教育学ではない」として，「とりわけ教育学の一領域として固有の位置」で「学としての確立が図られていく」可能性を主張する。

次に，残された紙幅の範囲で，若干の感想やコメントを述べたい。

○ 理念と指導法

第Ⅳ章の第１節での池田栄による理念と指導法との一体化の追求に関して，その一方策として，第２・３節で「発達図・案」が提案される展開は理解しやすい。一方，著者は，マンガやイラストレーションに言及して，子どもにとって「真実性のある表現の条件が写実性だとはいえないのが現実」だともする。そうした表現を「発達図」に，どのように位置づけていくのかが今後の課題になるであろう。それは，異なる時代や社会・文化的な状況における，この造形表現能力「発達図」の普遍妥当性を問うことにもなる。

○「限界芸術」

鶴見俊輔のいう「限界芸術」は，ウィリアム・モリスがいう「小芸術（lesser art)」にも通じる生活芸術ともいうべき考え方で,鶴見は「えがく」の例として「らくがき，絵馬，羽子板，おしんこざいく，凧絵……」などを例示している。この「限界芸術」が，教育という場で，H.リードの「芸術による教育」における「芸術」（近代美術など)，北川民次のいう「整理」する「芸術」表現での「芸術」(絵画芸術）と，どのような形でつながっていくかについて，さらなる論証を期待したい。

○ 表現と模倣

第Ⅴ章の第１節では，「表現」(expression)と「模倣・ミメーシス」(mimēsis)を対比させて芸術の真理性を論じている。「ミメーシス」は西欧文化における「リアリズム」を支える考え方である。「ミメーシス」を芸術教育論に適用する本節の論述は刺激的で，芭蕉が「造化（自然の理＝道）にしたがう」というのも「道（タオ)」の「ミメーシス」か，など日本の芸術と「ミメーシス」の関係も考えさせられた。視覚芸術に関して言えば，英語の「表出(expression)」と「再現（representation)」という「表現」の二つの契機の分析も，本節で設定された問題の解決に有効ではないかと思う。

○ 芸術教育学の学的な根拠

第Ⅴ章の第３節では，芸術教育学の「学」としての固有性を「教育学の一領域」に求めている。一方，教育学にも他の学問と異なる独自の方法や概念装置がまだ確立されていないことも著者は指摘する。「二重の困難」を抱えながら，なぜ，芸術教育「論」ではなく芸術教育「学」でなければならないのかという議論も，ここでは必要なのではないか。また，「芸術と教育との間に位置する美術・芸術教育」の独自の在り方について，たとえば，E.・アイスナーが「教育は芸術から何を学ぶことができるか？」として，８つのアイデア（形式と内容との一体化，言葉の限界，身体感覚の重要性等）を学ぶべきだと提案している。「学」的根拠の論証には直結しなくても，こうした提案も，芸術が教育を変えていくという著者の思いと軌を一にするものでないかと考える。

本書の「あとがき」には，16 篇の論文について「収録に当たってそのほとんどに大幅な加筆及び修正を行った」とある。重複部分の整理や論旨の整合性の確認などがなされたと推測するが，その成果として，本書は単なる論文集ではなく，それなりに一書としてのまとまりもある。著者は，「多元的な芸術の原理をから生まれる芸術活動や作品がポリフォニックに展開される芸術教育論」を構想していることを繰り返し主張している。その意味で，本書自体も，執筆時期も発表媒体も異なる論文（音程の異なる音声）が響き合う多声音楽(ポリフォニー)で，そのメロディーは著者の研究者としての歩みであり，その通奏低音は「芸術教育の可能性の追求」といえる。今後，そのメロディーのさらなる持続・発展を期待したい。

新刊案内　Announcement of the New Book: The Art of My Research in Art Education

著者：美術教育学叢書企画編集委員会　直江俊雄：責任編集　発行：学術研究出版
2022 年 12 月（初版）　ISBN 978-4-910733-82-1

美術教育学叢書３　美術教育学　私の研究技法

2019-2021 年度　美術教育学叢書企画編集委員

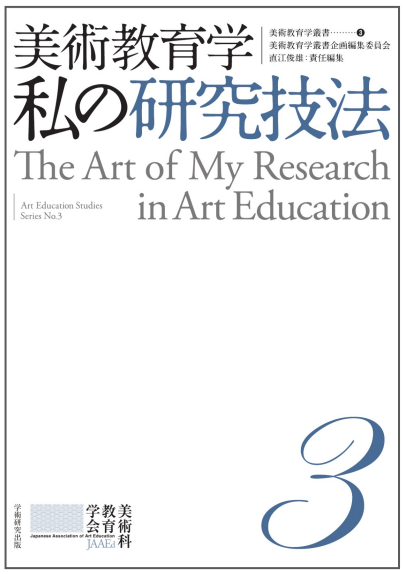
あなたの研究技法をここから始めよう

直江俊雄

美術教育学叢書の第３弾を，３年越しの企画・執筆・編集期間を経て『美術教育学　私の研究技法』と題し，昨年 12 月に発刊した。ぜひ早く手にとって，あなたが自らの創造的な研究技法を生み出していくために活用していただきたい。読んだ上での批判や異論など大歓迎である。

第Ⅰ部「研究技法のすすめ：ミニ・リサーチハンドブック」は，美術教育研究を行う際のガイドブックを目指した。直江による「美術教育者と研究技法」では，研究の過程を芸術表現になぞらえて描くとともに，初めて美術教育論文に取り組む人のためのチェックリストを提案する。新関による「美術科教育学会『研究倫理綱領』を読み解く　理解を深めるために」では，今日の研究者に求められる研究倫理を学ぶことができる。

第Ⅱ部「私たちの研究技法」では，10 名の研究者がそれぞれの研究技法について自身の生き方も交えて語りかけ，新たな研究に挑みたいとの構想が，読者の側にも湧き上がることを期待した。第Ⅲ部「海外の研究者に聞く」は，２組の研究者への直江によるインタビューである。



A5 サイズ　166 ページ
本体 2,200 円+税
Bookway のサイト（下記）では，30 頁分を「立ち読み」可能。Amazon でも購入できる。
https://bookway.jp/modules/zox/index.php?main_page=product_info&products_id=1407

本書の構成

第Ⅰ部　研究技法のすすめ：ミニ・リサーチハンドブック
直江俊雄　美術教育者と研究技法
新関伸也　美術科教育学会「研究倫理綱領」を読み解く　理解を深めるために
第Ⅱ部　私たちの研究技法
縣　拓充　美術の学びに対する心理学的アプローチ
若山育代　幼児の描く姿に惹かれて
池田吏志　美術教育と特別支援教育と私のあいだで生まれる研究
渡邉美香　抽象表現・映像メディア表現と教育研究
大島賢一　足下を掘る　地方美術教育史の面白さ
竹内晋平　一次資料からのエビデンス作成による美術教育史研究　京都府の毛筆画教育に関する調査を事例として
中村和世　海外美術教育史の研究手法と実際
村田　透　子どもの造形表現行為の根源的な在りようを問う　「造形遊び」の質的研究を通して
笠原広一　ワークショップ研究から Arts-based Research（ABR），そして A/r/tography へ
大泉義一　図画工作・美術科の授業研究　教師の発話に関する研究をめぐって
第Ⅲ部　海外の研究者に聞く
銭　初熹　／徐　英杰　異文化の中で研究するということ　中国と日本における美術教育研究
リチャード・ヒックマン　ある美術教育者の自画像　日々の教育実践から世界を見つめて

➔ 次のページでは，本書に携わった叢書企画編集委員それぞれの思いを紹介する。

美術教育学叢書第３号について　　2019-2021 年度　美術教育学叢書企画編集委員より

地道な＜探究の道のり＞を歩むために

宇田　秀士

その人なりの研究方法を確立していくことは，研究を地道に進めるために大切なことである。まずは，基礎的な手法を学び，さらに同じ分野や関連する他学会における先行研究者の研究方法に＜真似び，学ぶ＞ことが一般的である。ただ，基礎的な学びがあることが大前提であるが，子供，表現内容，歴史・社会的事象といった研究対象に合わせて粘り強く修正，応用させていかないと最後まで辿りつけないことが多い。「これだ！　」と思った方法で進めても，思わぬズレや矛盾が生じ，何度かの試行錯誤を経て，ようやく及第点に至るということが実際には多いからである。本書では，一般的な研究方法の解説書には出てこない，各研究者の発想の原点，迷いや焦燥，紆余曲折の過程も読み取ることができる。若き世代には，良き学びとなり，中堅・ベテラン世代にとっては，共感や批評が生まれると言える。＜学会における[コロナ禍オンライン文化]の中での対話・議論不足＞からの脱却に向けて，その一助となることを期待する。

あらためて美術教育を研究することの意味を考える

大泉　義一

本書で私は企画編集委員であると同時に，自身の技法を語る執筆者として参画させていただいた。その立場から本書を読み返してみてあらためて思うのは，美術教育における研究技法とは，研究者の生き様からうまれたリサーチクエスチョンに対する回答について他者を説得しその意味を共有する試行錯誤のプロセスなのだということだ。直江俊雄氏とのインタビューでヒックマン氏が「芸術的研究」の基準を他の教育研究と比較し提唱している箇所は，本書に掲載されている各技法を総括する考えであると捉えた。その総括を参照したのちに各技法を読み進めることをお勧めする。学術研究としての美術教育研究は科学的であるべきだ。しかし同時に我々が対象にしているのは，紛れもなく子どもであり人間の営みである。それは不確定な要因を孕んでいるがゆえに，それと向き合う研究者それぞれの思惟が伴うことは無視できない。以前，私は学会通信（第 107 号）で次のように述べた。「歌うように論文を書きたい。」と。今ここで，そう語った自分を振り返りつつ読み返してみたい。

作品を見るように，作者＝研究者の“生”が立ち上がる

佐藤　賢司

アート作品の鑑賞で，最も心動かされる時は作者の存在―“生”が立ち上がった時です。作品は匿名の誰かのものでも，自然とそこにあるものでもありません。生きた時間，体験，時代の空気…その時，その作者の手によらなければ生まれないものです。研究も同様です。もちろん後代の研究者のため，より多くの人が共有するために，研究者は普遍的な成果を求め，一般化を進めます。しかし，いかに客観性を求めたとて，やはりその研究は，研究者自身がいなければ動きださないものであり，誤解を恐れずに言えば，個人の経験―人生に依って立つものです。本書は，まさにその個人＝「私」に焦点を当てた研究技法＝アートの，展覧会のような美しい集合です。ここで触れることのできる，池田吏志氏や中村和世氏の「技法」の基となる経験―生き方は，その研究の「意味」のリアリティを私たちに伝えてくれます。作品を鑑賞するように，作者の“生”を感じながら，本書を繰り返えし読みたい…，巻末のヒックマン氏の語りもまた，その思いを一層強くさせてくれるものと言えます。

これからの時代の研究作法を学ぶ基本図書

山木　朝彦

直江俊雄代表理事自らが責任編者としてまとめた本書の特徴は，次世代を担う美術教育研究者が研究を展開する上で不可欠な研究作法を明確に示したことである。人文・社会科学領域では，自由なエッセイと区別がつかない括弧付きの(研究)が，日々，量産されている。しかし，研究と称するには，その言葉に見合うまっとうな研究作法が必要である。直江執筆の「美術教育者と研究技法」には，正統な研究手続きとは何かについて，懇切丁寧かつ具体的に書かれており，研究と私的なエッセイや説明文を見分ける基準をここから学ぶことができる。このほか，研究資料の扱い方について述べた竹内晋平，海外の教育思想研究に誘(いざな)われたプロセスを詳述した中村和世，揺らぎなく，授業実践を自らの研究の基底に据える姿勢を表した大泉義一，そして，海外の研究動向を伝えてくれたR. ヒックマン(直江との対談)，銭と徐（直江を交えた鼎談形式）に，私は感銘を覚えた。

本部事務局より　Notice from the Secretariat

■2023会計年度までの会費納入をお願いします

「2023会計年度会費」は，2023年７月末日までに納入いただくようにお願いしています。３月の大会，リサーチフォーラム，学会誌刊行などの学会運営は，会員の皆様の会費により運営されています。

ご自分の各年度の年会費納入状況については，以下の「会員 情報管理システム」にログインすることにより確認が可能です。

https://service.gakkai.ne.jp/society-member/auth/AAE

なお，納入状況に疑問がある場合には，下記の本部事務局支局アドレスにお問い合わせ下さい。

＜留意事項＞

次年度学会誌(第45 号)への投稿並びに次年度大会(第46回大会）での口頭発表に際しては，投稿や申込みの時点で以下の２つの条件を満たしている必要があります。

①会員登録をしていること

②当該年度(2023会計年度）までの年会費を全て納入済みであること。

＊会費を２年間滞納した場合は，会員資格を失います。

会費納入に関するお問い合わせ先：
（株）ガリレオ 東京オフィス 担当者 和久津君子
［窓口アドレス］g030aae-mng@ml.gakkai.ne.jp

■会費振り込み口座名・番号

会員の皆様に送付される振込用紙，郵便局にある払込用紙又は銀行等からの振替により下記の口座に納入してください。

・銀行名： ゆうちょ銀行
・口座記号番号： 00140-9-551193
・口座名称： 美術科教育学会 本部事務局支局

通信欄には，「2023会計年度会費」等，会費の年度および会員ID番号を記入してください。また，ゆうちょ銀行以外の銀行からの振込の受取口座として利用される場合は，下記内容を指定してください。

・店名(店番)： 〇一九(ゼロイチキユウ)店(019)
・預金種目： 当座 ・口座番号： 0551193

■大学院生等への会費減額措置(申請は毎年必要)

大学院生等は所定の手続きにより，年会費を半額(4,000円)に減額する措置を受けることができます。会費減額措置を希望する大学院生等は，毎年，５月中に各自，申請手続きをすることになっています。申請しない場合は，減額措置を受けられません。未だ手続きがお済みでない方は，学会ウェブサイトをご参照ください。

http://www.artedu.jp/bbfet2or4-8/#_8

なお，本制度は，大学院生等に対する経済的な支援を目的として設けられています。指導教員の先生は，申請者が，以下のいずれかに該当するか確認の上，申請させて下さい。

①勤務先を持たない「大学院生又は大学院研究生」である。

②勤務先を持つが，「長期履修制度」等を利用し，当該会計年度の間，無給の「大学院生又は大学院研究生」である。

■学会誌第44 号に投稿され，掲載負担金について公費払いを予定している会員の皆様へ

学会誌第44　号に投稿された会員で，掲載が許可された後，掲載負担金について公費払いを予定している会員の皆様にお知らせします。公費払いとは，大学研究費や科学研究費補助金などで支払うことをさしています。掲載負担金は，掲載ページ数が確定した時点（３月初旬を予定）で請求します。本部事務局支局からの請求書にしたがってお振込みください。ただし，各所属先が求める形式で請求書類を別途用意しなくてはならない場合は，そこから本部事務局支局と相談・交渉し始めたのでは，手続きが間にあわないことがあります。以下の留意点を読み，各所属先で前もってご確認いただき，相談・交渉するなど今から準備を始めて下さい。

＜留意事項＞

１．原則として，必要な書類は，投稿者自身で作成いただき，書類等に捺印が必要な場合は,本部事務局支局までお送りください。作成いただく書類は，本部事務局支局からの「振込負担 金請求書」以外の書類全てとなります。
　また，送付前に事前に以下までご連絡下さい。

２．投稿者自身による「立替払い」を原則と致します。

３．上記1，２を原則としますが，大学事務局と本部事務局支局が直接やり取りをしなければいけないケースがあります。この場合には，以下まで，手続きの概要，事務担当者の連絡先などをメールで知らせて下さい。

美術科教育学会 本部事務局支局
〒170-0013 東京都豊島区東池袋2 丁目39-2-401
（株）ガリレオ 学会業務情報化センター 担当 和久津 君子
［ 窓口アドレス］g030aae-mng@ml.gakkai.ne.jp

■住所・所属等変更，退会手続き

住所，所属先等に変更のあった方は，すみやかに本部事務局支局までご連絡ください。退会を希望される場合は，電子メールではなく，必ず文書（退会希望日を明記してください）を郵送にて，本部事務局支局宛にお送りください。あわせて，在籍最終年度までの会費納入完了をお願いします。

美術科教育学会 本部事務局

The Japanese Association of Art Education's Secretariat

■〒305-8574　茨城県つくば市天王台1丁目１－１　筑波大学芸術系
直江俊雄（代表理事）naoe@geijutsu.tsukuba.ac.jp
吉田奈穂子（本部事務局員/会員名簿）yoshida.nahoko.gn@u.tsukuba.ac.jp

■〒184-8501　東京都小金井市貫井北町４－１－１ 東京学芸大学
相田隆司 （総務担当副代表理事/本部事務局長/庶務・会計・規約）t-aida@u-gakugei.ac.jp

■〒371-8510　群馬県前橋市荒牧町４－２　群馬大学
郡司明子（本部事務局理事/会費管理）gunji@gunma-u.ac.jp

■〒108-8636　東京都港区白金台１－２-37　明治学院大学
手塚千尋（本部事務局理事/ウェブ）tetsuka@psy.meijigakuin.ac.jp

■〒870-1192　大分県大分市大字旦野原700番地　大分大学
藤井康子（本部事務局理事/学会通信）fujii-yasuko@oita-u.ac.jp

■〒169-8050　東京都新宿区西早稲田１丁目６－１　早稲田大学
大泉義一(研究担当副代表理事/学会誌編集委員長）oizumi@waseda.jp

■〒187-8505　東京都小平市小川町１-736　武蔵野美術大学
三澤一実(事業担当副代表理事/リサーチフォーラム統括/8団体連携会議）kmis@musabi.ac.jp

□美術科教育学会 本部事務局 支局
■（株）ガリレオ(https://www.galileo.co.jp/)　学会業務情報化センター
〒170-0013　東京都豊島区東池袋２丁目39-2-401
（ 担当者 和久津君子 ）　TEL　03-5981-9824　FAX　03-5981-9852